

教育研究所だより

明石市教育研究所

歴史上の“ひと・もの・こと”について脈絡なく気ままに取り上げ、史実をもとにするものの「所詮、歴史的事実（史実）は新たな資料の発見により変わるのだから」と決め込み「私的に、こうだったらステキだな」（私実）も織り交ぜて歩いてみようと思っています。

廣岡所長の



あちこち歴史散歩 No. 7

本日のお題は… 阿弭流為（アテルイ）と母禮（モレ）

奈良時代末から平安時代初頭、中央政権にとって東日本の平定は念願のひとつでした。光仁天皇の後を受け即位した桓武天皇は、長岡京そして平安京遷都を実行するとともに、中央政権が蝦夷（えみし）と呼んでいた東北地方に文化圏をもつ勢力の制圧と金を産出するその土地を手に入れることに執着しました。対して、その侵略に抗う戦いを20年近く指揮したのが胆沢（いさわ：現在の岩手県奥州市）を本拠としていた阿弭流為（アテルイ）、その参謀が母禮（モレ）なのです。

高橋克彦原作の小説「火怨（かえん）」などで蝦夷の英雄として描かれる阿弭流為ですが、史誌に彼が登場するのは、『続日本紀』にある「巢伏の戦い」についての記述と『日本紀略』にある阿弭流為の降伏に関する記述のふたつしかありません。しかし、直接的な記述がなくても、遠征の度に1万、5万、10万と倍増していく派遣兵の数、将軍や行政官などの任命罷免の様子、中央政権との事務やり取り文書などから、頑強な蝦夷の抵抗により征夷事業が思うように進んでいないことが分かります。それらの様々な記録を重ね合わせ、矛盾を解きほぐしていくと、大軍団を相手に奮闘する蝦夷軍の姿が見えてくるのです。阿弭流為の物語は、まさにそのようにして生まれた史実（私実）であり伝説であるとも言えます。

もう少し詳しく、史実に現れる阿弭流為を紹介しましょう。蝦夷の中央政権軍に対する抗戦は、780年に起こった伊治皆麻呂（これはるのあぢまる）の乱をきっかけに30年近く続きます。789年に、征東大將軍紀古佐美（きのこさみ）が率いる1万の軍を阿弭流為が率いる1,500の蝦夷軍が迎え撃ちます。これが、「巢伏の戦い」です。

（その2へつづく）



「蝦夷・アテルイの戦い」 久慈力 批評社
真偽は定かではないが、アテルイと同一視されている悪路王の首（木製）が表紙を飾る